
+ BURNING BLOOD +

蜜柑 汁洲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

+ BURNING BLOOD +

【Zコード】

N7462Y

【作者名】

蜜柑 汗洲

【あらすじ】

物語の舞台となるのは、今より十数年…或いは数十年後の地球。時間という大樹から枝葉のように無数に分かれて伸びていく未来の中の一つ。

人類滅亡の危機に瀕し、多くの人々が遠く届かない憧れを抱いていた超能力を持つてしまうと人々は何を成すのか。

超能力を希望と慈愛に溢れた人類再興への光の道しるべとするのか。はたまた

超能力を絶望と怒りに満ちた人類滅亡の崖道への片道キップとする

のか。

幻想の中の決して届かないと思われた力を手にした時、人類はどんな方向へ歩み始めるのか。

これはそんな i-f の物語……

/ /

とまあ色々上で中二病っぽく書いたわけですが、ダーク有り、シリアス有り、コメディたまにしか無し、の基本的に『熱い』展開のモノにしていく予定です。

最近熱さが無いと思いませんか？炎のごとく燃える『熱さ』、血が騒ぐような『熱さ』……。

最近の流行りは、日常生活に田を向けたほのぼのとしたものや、力ツコよさを追求した熱さばかりな気がします。

泥にまみれて、涙に濡れて、血反吐を吐くような泥臭い『熱さ』があつたつていいんじゃないでしょうか？

私にそれほどの文才があるかどうかは分かりません。ですが、私はそれを目指して物語を書いていきます。

暖かい…いや、『熱い』目で見てくれるト私は本望です！

物語の舞台となるのは、今より十数年…或いは数十年後の地球。時間という大樹から枝葉のように無数に分かれて伸びていく未来の中の一つ。

人類滅亡の危機に瀕し、多くの人々が遠く届かない憧れを抱いていた超能力を持つてしまうと人々は何を成すのか。

超能力を希望と慈愛に溢れた人類再興への光の道しるべとするのか。はたまた

超能力を絶望と怒りに満ちた人類滅亡の崖道への片道キップとするのか。

幻想の中の決して届かないと思われた力を手にした時、人類はどんな方向へ歩み始めるのか。

これはそんな i-f の物語……

はい！とまあまずはさておき第0話ですよ、皆様。

初めての方も初めてじゃない方もここにちは、いらっしゃいませ、
よろしくお願ひします。

作者の蜜柑 ミカン 汁洲 ジュウス と申します。

えー私の自己紹介といいますか、今後の更新頻度のことで先に言い訳をさせていただきたいのですが、私は現在専門学校生です。

課題が忙しかつたりするので更新は不定期まつたり更新になると思うのですが、無理しない程度にはがんばります。

さてさて、諸注意なんですが…まあ のあらすじを読んだだけじゃなんじやこりやーーって思う方ばかりですよねー。

ククク、計算通り（ニヤツ ）というのは実にどうでもいいことで、実際はちょっとでも興味を引いて中を見ていただければなあと

いつもあざとこ思考によるものです。

なので、今ここまで読み進めているアナタはまず私に引つかかつたところになります、感謝感謝です。

で、肝心な内容なんですが、まず一番重要な設定が隕石が地球に落っこちた！というものです。

単純ですが、ここがこの話のキモになるので押えておいてほしいです。

あとはそこから話が広がっていくのでそれも押さえてもらえればなんとかなるかと思います。

これ以上はちょっとお話しするひとは出来ないので、これはこの辺で。

視点の方は基本的に第三者視点でこいつと思っています。

ただ、作中でAルートを進む方とBルートを進む方とで切り替えをする予定です。

切り替えをして投稿する時はサブタイトルにその旨を書くのでよろしくおねがいします。

今の段階ではとくにこれといった諸注意は無いので、これにて第0話をさせていただきますが、このページの変更が行われた時は最新話のあとがきに変更の旨を記載しておきます。

それでは皆様、じゅわるっと気楽に読み進めていく下され

001 プロローグ

現在、地球は異常気象や動物の突然変異、絶滅、生態系の変化などの問題に追われていた。

今まで何十年にも渡つて調査してきていた地球に関するデータなどは意味をなさなくなることもしばしばであった。

科学者たちは現在の状況を解明しようと大忙しで駆け回り、政治家たちは国民の混乱を防ぐために様々な政策を発表したりして奮闘していた。

そしてそれは世界各国のどのような場所でも行われていた。

この混乱の原因を全ての元へと辿つていくと、一つの大事件につきあたることとなる。

それが俗に『隕石漂着』と言われるものだった。

この『隕石漂着』を最も早く予期していたのはNASA航空宇宙局の科学者たちだった。

予期していたと言つても、実際はNASAの科学者たちが予期していたのは小惑星との衝突による地球全域を巻き込んでの地球滅亡であつて、厳密に言つと『隕石漂着』のことではなかつた。

しかし、もちろん隕石が地球に来て、人類に大規模な損害をもたらしたのは言うまでもないことだ。

隕石漂着による余波で大津波や、プレートの歪みによる地震が頻発するようになり、二次、三次などを合わせた様々な災害によつて人類の約5分の3が犠牲になつた。

それでも、隕石の落下による地球の瓦解などの地球滅亡の危機は起きたなかつたし、何百メートルもあるような超巨大津波で世界が沈むことはなかつた。

どういうことか、その隕石は軽石みたいに中がスカスカになつておる、一見した見た目よりも質量はかなり軽く、落下地点が海だった

ために落下の威力が津波となつて落下時の衝撃を分散したおかげで被害が地球滅亡レベルまでに及ぶということは無かつた。

もちろん落下地点の近くに住んでいた人々には津波などで甚大な被害が出たので、手放しに喜べる状況では無かつたのは確かだつた。そして、驚くべきことにその隕石は衝突による衝撃で海底山と結びつき、新しい島を形成した。

『カラミティアイランド』と呼ばれるようになつたその新しい島は、それから特に動きを見せることも無く地球の一部として馴染んでいつた。

しかし、それよりももつと凶悪な、全世界に被害をもたらすようなものがその隕石にはあつた。

それが放射性物質『アビリタイト』と後に呼ばれるようになる、濁ったエメラルドのような輝きを発する物質だつた。

地球のどの物質にも当てはまらないそれは、その放射性物質がもつある特性から取つて後の世でそつよばれるようになつたが、落下当初は『災いのもと』『死の岩』『不幸の結晶』などと呼ばれて恐れられた。

隕石の落下によつて、そこから海に流れ出したその放射能は海流に乗つて、または風に乗つて全世界へと散つていき、世界各地に放射能をまき散らした。

そのため全世界では人間に限らず、生物であれば奇形や、突然変異などを起こしてしまい、もともと少なかつた動物達の一部は絶滅したり、変化したせいで生態系の変化が起つてしまつたりと、急激な生態系の変化が起きた。

人間も放射能の影響をうけたために発癌、急性白血病、白内障などの被害を受け、生まれてくる子どもたちは奇形児だつたり、精神障害を持つていたりもした。

これらが世界各国で起つてしまつたため、各国はこの人類に対する危機のために渋々ながらも手を取り合い、資源や機材を出し合つて除線をしたり、『カラミティアイランド』を中心とする放射能遮

断のためのドーム型の隔壁のようなものを作るなどの対策をとった。このドームのお陰で放射能は漏れなくなり人類は助かつたものの、隕石の周りは人が住むことが不可能なほど汚染されたので一般人立ち入り禁止として、上空を旅客機が飛ぶことも禁止した。

ドームに囮まれたカラミティ島の管理は、宇宙からの未知の物質を狙つて各国が欲しがるせいで所有権を決めることができないために、各国の混成チームが編成されて管理をすることになった。

そうして、人類は多大なる被害を受けながらも時間をかけて再び立ち上ることになんとか成功していった。

時間は少々かかったがこれで元の生活に戻れると思い、それぞれが元の生活へと戻つていく時だった。

事件から7年たつた冬の夜、隕石漂着のせいで人口が激減し、第二アメリカ合衆国として再生した旧ニューヨークにある寂れたデパートで、人質立てこもり事件が起こつた。

犯人によって人質としてとらえられたのは32歳の母と11歳の男児で、その二人は休日に買い物にきていただけの平凡な家族の一員だつた。

父親も一人とともにデパートへ來ていたが少ない物資を多く集めるために別行動をしており、何が何やら分からないうちに避難をさせられた時には、既に二人は人質としてとらえられていた。

そして視聴者がほとんどいなくななり一局しか映らなくなつたTVでは、警察による交渉の失敗、狙撃チームによる犯人狙撃作戦の実行の様子をリアルタイムで報道していた。

警察の狙撃犯チームの中でも最も優秀な狙撃手によつて、銃口からマズルフラッシュとともに飛びだした弾丸は寸分の狂いもなく犯人の頭部を貫通し、一瞬で意識を刈り取つた。

しかし、犯人が倒れていくときにトリガーに指が引っ掛けたままだつたのか、母親のこめかみに突き付けられていた銃は跳ね上がりながらトリガーを引かれ、母親の即頭部に銃弾を撃ち込んだ。

犯人に次いでその場に崩れ去る母親を見た少年は、愕然とした面持ちで母親の死に顔を見つめ、そして理解をしたときに悲痛な叫び声を分厚い雲がたちこめる空に放った。

テレビの向こう側にいる数少ない人も、現場にいた様々な立場の人も、そして少年の父親も視線を落として、涙をこらえた。

そして、それから初めに異変に気付いたのは現場の警察官だった。いつまでもただただじっとしていいるわけには行かないと思ったのか、少年のところに行つて、安全な場所まで連れて行こうと近くまで駆け寄つたその時に、警官は叫んでいた少年がいつのまにか俯きながらボソボソと何か声を発していることに気付いた。

一体なにごとだろうと訝しんだ警察官だつたが、母親が目の前で死んだなら受け入れがたいこともあるだろうと思ひ納得して、そのまま駆け寄つて少年を連れて行こうと少年の手をとつた。

しかし、その警官の体が突如として灼熱の炎に包まれて一瞬のうちに消し炭となつた。

あまりの突然の展開に全ての人が呆然とする中で少年の体も、周りの空氣さえも焦がす灼熱の炎で包まれていいく。

一際大きな炎に包まれ、熱風をあたりにまき散らしたかと思うと、その少年は炎の中で言葉にならない怨嗟の声で吠え、近くにいた警官隊の中へと飛び込んだ。

高温の炎に焼かれて次々と消し済みになつていく警察官たちは、炎の奥にちらちらと見え隠れする少年の姿に撃つことを一瞬躊躇い、その間に炎に身を焼かれていった。

少年の父親はまわりの制止をふりほどいて、少年をなんとか止めようとしたが、その手は無情にも少年に届く前に炭と化し、地面へ崩れ去つていった。

報道を見ていた人々は愕然とし、あるいは呆然としてニュースを食い入るように見つめていた。

そして、ニュースは機材が熱にやられて壊れるまで続き、その少年の暴れる様が米国全土にあますことなく伝えられた。

その後散々暴れまわった少年は力を使いきつたのか、糸が切れたかのように唐突にその場に倒れこみ、すぐさま特殊部隊の手によって拘束され、強力な睡眠薬を打たれた上で連行された。

旧ニューヨークの街の一角は戦場になつたように焼け焦げ、壊れたがすぐにあたり一帯が封鎖されることになり、報道関係者の接近も許されない一切立ち入ることが出来ない厳戒態勢がしかれた。

報道番組では先ほどまで写されていた映像を元に専門家などを電話するなどをして、さきほどまでの映像の解析を進めていたが、そのどれもが宇宙人や、合成映像などと様々な憶測を飛ばさせていた。

一方そのころ、件の少年を保護・拘束した特殊部隊の面々は、頭にハテナマークを浮かべながら何故即時射殺をしなかつたのだろうかと思つていた。

通常ならば警官を何人も殺してしまつと即時射殺命令が下されるはずなのだ。

しかし、上官の『生かしたまま連行せよ』という命令は絶対だとして、今は眠れる少年の様子をこわごわとみていた。

少年の寝顔は年相応のあどけないもので、強力な睡眠剤を打たれたせいでピクリとも動かないその様は一見死んでいるように見える。しかし、その実態は不可思議な能力を使って現場にいた警察官を皆殺しにした凶悪な犯人。

少年の様子を監視している特殊部隊の人間は恐怖をおぼえることはあっても、少年にかわいらしさを覚えることは無かった。

その後、さらなる上官の命令で行き先を変更した車は、秘密の通路を使って軍の秘密研究所（通称：SSRF（Seventh Secret Research Facility）と呼ばれる『第七秘密研究施設』）へと向かう。

施設に着いた隊員は少年を厳重に拘束したまま車から降ろすと、救急で患者を運ぶような台車の上に拘束具を取り付けたものに少年を拘束しなおして研究所の中へと運びこんだ。

隊員に課せられた仕事はここまでで、その後の少年のことは施設に

いる研究員に引き継がれる。

少年の意識が戻ったあとは研究員によつてしばらく尋問が続き、そして初めこそ人道的な少年の意思による協力の研究が進められていったが、次第に研究は苛烈していき、最終的には少年の意思を無視した非人道的な研究が進められていくことになる。

研究員たちにとってはその少年はもはや興味深い研究対象としか目に映らなくなり、両親も既に死んだ少年は引き取り手のいない都合のいいモルモットでしかなかつた。

そして非人道的な研究が積み重なつた結果、拷問にも似た研究が終わることを望んでただただ我慢していた少年はついに自分の舌を噛み切つて死んだ。

研究員たちがその様子を見て最初に言つたのは「しまつた。自殺防止用に轡でもかませておくんだつた。生きた貴重な素材がなくなつてしまつた」であった。

研究結果が整えられ、SSRFからあがつてきた極秘報告書を読んだ当時の大統領は、全米生中継によつて全国民の知ることとなつた事件の真相を公表することを決定した。

その日、大統領は「現在、世界には超能力と呼ばれるような力を使う、いわゆる『能力者』が現実的な脅威として存在します。」と、全世界へと『能力者』というものの存在を公表した。

その日から『アビリター』と呼ばれる能力者達の地獄の日々が始まつた。

001 プロローグ（後書き）

つと、まずは導入部分のプロローグでござります。色々と設定が出てきているので、「〇〇をある程度抑えておいてくれれば後の話がスマートになると思います。

あ、それと、誤字指摘、質問などは感想欄に書いていただければ修正、返信するつもりですが、批判的な意見だったり、明らかに荒らしとみなした場合は削除したりもします。

赤司波剛毅アカシバゴウキは、両親を生まれてから直ぐに失うことになった孤児の一人だった。

隕石漂着のために父と母が多量に放射能を被ばくし、そのせいで患つた癌のために剛毅が3歳の誕生日を迎える直前に死を迎えることとなつた。

両親は幼い剛毅を残して死ぬことに涙を流しながら悔み、剛毅のその後の成長を親戚に託した。

しかし、その親戚は最初こそ普通に育てていたものの、自分の子供でもない剛毅を育てていくことに次第にストレスを覚え始め、剛毅が11歳になつた時に剛毅を連れて海外旅行に行き、僅かなお金と食料を持たせてそのままおきざりにして帰つた。

当時は隕石漂着の影響があとを引く食料不足や、失職による貧困で、子供を捨てるということは珍しくなく、一応国が禁止をしてはいるものの後が絶たなかつた。

経済の結びつきが強かつた国との交通は比較的早く安定し、渡航料金も国家間の経済復興のために震災特別料金で通常よりも安めに設定されていたのもその一因だったのかもしれない。

国内にそのまま捨てられることが多かつたが、国が負担する養育費用削減のため震災孤児の親を見つける方針がとられており、捨てたとしても親のもとに帰つてくることが多かつたのも海外に捨てられる要因になつた一部だらうと考えられる。

かくして11歳という幼さで海外に一人捨てられた剛毅は、容赦のない厳しい環境の中で砂と埃にまみれて育つていくことになつた。

そして見知らぬ土地に捨てられてから1年が経ち、当初持っていたお金もとっくに全て使い果たした剛毅は子供なので当然働くことも出来ず、空腹も限界に近付いていたこともあってホテルの裏手で自分と同じような子供が、廃棄された食べ物の袋を漁っているのを見てふらふらと近づいていった。

「どうかいけ！これは俺のだ！それ以上近づくならブツ殺してやる！」

相手の少年は、自分と同じような子供が近づいてきたのを見て、自分の貴重な食料が奪われると思ったのか、刃が錆びついたカッターを取り出して剛毅に威嚇してくる。

その少年の剣幕を見て気圧された剛毅はそのまま後ずさり、背を向けて歩いてきた通路を走って引き返した。

しかし、その走りも空腹のために次第に力を無くしていく、剛毅は薄汚れた裏路地の壁に手をついて力なく息を吐き出す。

このまま何も食べられずに飢えて死ぬのだろうか…と考えた剛毅の背後から細長く伸びた影が差した。

いきなり差した影に何だろうと思いながらもそれからゆっくりと田を向けると、路地の入口で片手に缶詰めが入った袋を持った少年が立っていた。

その少年は、剛毅の痩せた体とやつれた表情を見るとおもむろに剛毅の方へと近づいていき、袋の中から缶詰めを取り出すと缶のふたをあけて剛毅に手渡した。

「腹へつてんだろ、お前。コレ食えよ」

剛毅はもう一つ缶詰めと少年の顔を交互に見たあと、空腹に耐えかねて缶詰めにがつづいた。

SPAM缶の油っこくて濃い味が口の中に広がると、空腹だった剛毅はそれだけで幸福をかみしめているように思え、もつと食べたいと思って缶の中に残っていた残りの肉を直ぐにペロリと平らげた。

「良い食いつぱりだな、お前。それにお前…。ん、いや…まあいいか。……よし、気にいった。こんなところにいたってことは、どうせ一人で行くところもないんだろう? ついてこいや、こいよりは多少はマシなどこりに付れてつてやる」

そいつた少年はぐるりと剛毅に背を向けて路地の奥の方へと歩き出す。

ここよりも多少はマシな場所があると聞いた剛毅は、自分に背を向けてさつと歩いていく少年の後を追つようふらふらとついていつた。

「帰ったぞ、眞。今日は一人新人を拾つてきたんだ。眞仲良くしてやつてくれ」

路地の奥へと進んでいつた少年は、工場跡地のようなところへ破れた金網の隙間を通して入つていき、錆びついたドアを音を立てながら開いた。

ドアの向こうから剛毅の目に飛び込んできたのは自分と同じぐらいの年に見える少年や少女3人ほどが室内で遊んでいる光景だった。

「ギルバート今日はちょっと遅かったねー。また寄り道してたのー

？」

「いや、話きてたか？ユリア。今日は新人を一人連れ帰ったんだつて今言つただろ」

「そつかそつか。あれ？そっちの子は誰？」

「だから！俺が連れ帰つたんだよ！」

「あははー、『めんねー』

「ぐう……こつもどおりマイペースな奴め……」

剛毅の前でたつた今起こつた寸劇によると、剛毅を連れてきた少年がギルバートというらしく、ギルバートの姿を見て駆け寄つてきて話をしていた天然がはいつた少女がユリアといつ名前の持ち主だということが分かる。

ユリアはこの工場跡地にいることが場違いな様な、キレイに整えられた明るいブラウンヘアの少女で、顔は可愛らしく、万人に愛されるような笑顔を持つ子だった。

「遅いわよ、ギルバート！あんたが寄り道する癖があるのは分かるけど、最近はアビリター狩りが行われてるって噂なんだから……。ただでさえあの事件の子と同じ年の子は怪しいって思われるのに

…

「わかつてゐ、シヨイラ。わざわざ心配かけて悪かったな

遅れていってきたのは磨けば光るだろ？が、汚れなどでくすんだブロンドヘアをポニー テールにしている活潑そうな少女だったが、

今は少しだけ心配だとこつ霧囲気がにじみ出でていた。

「…心配なんかしないわよ！あんたが連れていかれたら食料が無くなるから言つただけよ！」

照れ隠しにガツと見事なボディブローを決めたシェイラという少女はちょっと離れた位置にあつた壊れかけのソファにムスッとした霧囲気で腰掛けた。

「グッ……。いいボディブロー……だッ……！」

「いい加減学習したらどうだ。お前もシェイラの気持ちには気づいているんだろう？」「…」

「お、ティーダか。いやいや、ああいつ反応をするのがまたアイツの可愛いところであつてだな…」

「俺としてはいちいちサンドバックになるまでの意味が見出せないな…」

シェイラの綺麗に決まったボディブローを受けて膝をついたギルバートの横では、いつのまにか来ていたティーダという少年があきれたり感じでギルバートと話をしていた。

ティーダは黒髪で端正な顔の中に切れ長の目を持つた少年で、どことなく近づきがたいような雰囲気を発している節があった。

ティーダは、やれやれ…といった感じで肩をすくめて壁の方へ歩いていくと、壁に背中を預けて寄りかかると腕を組んで目を瞑った。

自分のことを置いてきぼりで次々と進んでいく展開に、さすがの剛毅も口を開こうとするとそれを察したのかギルバートが先に声を上

げた。

「おっと、悪い悪い。さてさて話の本題だが、今日は面白そうな子を一人見つけたので連れてきた。たぶん今日からここに住むから皆よろしくな～」

パンパンと2回手をたたいたギルバートは注目を集めたのを周りを見わたして確認してから口を開き、とても軽い口調でさらりと剛毅の今後にもかかることを発表した。

「ええ！？ちょっと！」「へらなんでもイキナリすきるでしょー！なんとなく想像はできただけど…………」

「……。ギルバートが面白がり……か。なるほどな……」

「わあ～よろしくね～。新しい能力者さんだね～」

「おー！コリアがそういうことはやっぱぱりアビリターだったかー！連れてきて正解だつたなー！」

「ええ！？ちよつとアビリターつてどうことよー？」

一人状況を理解していないシェイラが驚きの声をあげるが、他の3人はと言えばやつぱりそうだったかーと/or反応であり、シェイラだけが理解が追いついていない状況だ。

「あ、あの……。僕がアビリターつてどうことなんですか……？」

突然過ぎる展開についていけなくなったのかやつと口を開いた剛毅はギルバートへとおずおずと尋ねる。

「おお？ そうかそうか……。まだ発症前か。それなら知らなくても仕方ないわな、うん。お前な。能力者なんだよ。お前も知らなかつたんだろうけどな。俺は勘でお前が能力者っぽいって思つたから連れてきただけだつたんだけど、コリアが言つなら間違いない。お前は能力者だ」

「まさか……？ 僕が…アビリター……？」

「そうだ。お前は能力者。まあここにいる全員が能力者なんだが、コリアは他人の能力が見える能力者なんだ。だから、お前が能力者だというのは間違いない。能力がないと思ってるかもしれないけど、まだ開花してないだけだ」

まさか自分が能力者だなんて思つてもみなかつた剛毅は驚愕の事実を告げられて呆然と自分の両の手の平を見つめた。

しかし、当然それは何も変わつていらない普通どおりの様子でとても能力という『異常』が体に起つているとはとても考えられない。通常、能力という『異常事態』が体に起ると体のどこかしらに影響が出るらしく、能力者といわれるアビリターの体の一部には、色素異常だったり、奇形だったりという部分が目に見える形として現れることが多い。

そのため、剛毅は自分がアビリターであるということにはわかには信じられなかつた。

「ん~たしかに目に見える範囲には異常は見られないな、うん。まあそのうち見つかるだろうし、その時でいいんじゃないか？」

剛毅の服をまくつたりして足や背中とかも見たギルバートは、それ

らの場所に異常が見られなかつたことを少し不思議に思つたが、そ
のつち分かるだろうと思い、気楽に考えた。

ちなみに俺はここにそれっぽいのがあるぞと言いつつ、下半身のど
こかにあるのか、ズボンを脱ぎ始めたギルバートをシェイラが顔を
赤くしてはたいた。

「ててて…。まあそれよりもだ。お前もさつきシェイラの話を聞い
てただろう? 数年前の旧二コ一ヨークの事件が発端でアビリター狩
りが行われてるって話だ。当時の少年と同年代だつてだけでアビリ
ターフて思うやつもいるぐらいだ。たしかに当時の少年と同年代で
アビリターの奴は年下の奴らに比べて多いけど、そいつらの中には
もちろん何の能力もない奴もいる。最近じゃ能力者がどうかも無差
別で誘拐するようなこともあるらしい。実際アビリターの能力を悪
用しようと思えば洗脳なんかして簡単に出来るからそれが狙いだつ
たり、単なる武器として売買されたりつて話もある。お前もたぶん
それぐらいの年だろ? そんな奴らに捕まるぐらいなら俺たちと一緒に
樂しく自由に生きよつぜ」

真面目な顔に切り替えたギルバートは剛毅の目をまっすぐに見て、
アビリターであると自覚したばかりの剛毅に、アビリターを含む現
在の1~2歳以下の子供たち全てが置かれている状況を詳しく説明し
た。

剛毅もアビリター狩りが行われているなどの噂は街に捨てられてい
た古新聞などを見て知つていたが、アビリターとして自覚した後で
改めて聞いてみると背筋がゾッとした。

自分が見ず知らずの組織に捕まつて、ただの武器として一切の自由
もなくただただ苦痛を受け続ける人生を一瞬でも想像してしまつた
剛毅は、すぐに「よろしくお願ひします」と言つて頭を下げた。

そして、この日から剛毅はギルバート達との生活が始まったのだった。

002 Contaminated World（後書き）

はい、とこ「う」と早めの更新で第一話で「いやー」ます。あと数話分は既に書きあげてるので早めにじゅすることができました。
とりあえず今回では物語の進行に必要不可欠なキャラクター達を登場させました。

私がこのあとがきを書いている段階で既に6人ほどが読んで下さったようで、ありがとうございます。
ぜひ感想などを書き残して行って下さい。
作者である私の励みになります（笑）

「離せ！離せ！つってんだるー。」のくそつたのがアー！」

「ギル！くそがッ！なんだってんだよ、こいつらー離せーはなせよー。このクソ野郎！」

剛毅を含むギルバート達5人は現在、工場跡にガスマスクを装着して乗り込んできた特殊部隊風の男たちによって、コンクリートがむき出しの冷たくて固い床に頬を押しつけられていた。

「悪いな、坊主。これも仕事なんだ」

それだけ言葉を発すると、男たちはそれぞれが懷から銃の形を模した注射器を取り出し、剛毅達それぞれの首筋に密着させると引き金をひいた。

ブシュツと軽い音を立てて発射された針は、すぐに血中に薬を流し込み、剛毅達の意識を暗闇の底へと引きずり込んだ。

剛毅達が完全に眠りに落ちたのを確認した男たちはボストンバッグにいれて持ってきていた手錠や縄、轡、目隠しを取り出して剛毅達にかけていった。

完全に体を拘束された剛毅達は男たちに肩に担がれるようにして建物の外へと運ばれ、いつのまにか正面に来ていた黒塗りの護送車に放り込まれた。

護送車の頑丈な扉を2重のカギで厳重にロックしたあとは、男たちも護送車の運転席側へと乗り込んで車を動かし始める。

低いエンジン音を響かせる護送車は工場跡にその音を大きく響かせ、すぐに工場跡から去つていった。

剛毅達が見ず知らずの特殊部隊風の男たちに連れ去られる少し前、ギルバート達との出会いから3年弱が過ぎた剛毅は皆とすっかり打ち解けるようになり、同年代ではあるが自分を拾ってくれたギルバートを兄貴分として慕い、時には親友として笑い合い、口調もどことなく似るほどになっていた。

そんな剛毅とギルバートは工場跡の中でギルバートとポーカーに興じている最中だった。

「よし！きたきた！ストレートフラッシュ！これならギルも敵わないだろ！」

「ふつふつふつ…。甘いな剛毅…！見よ！我が必殺のロイヤルストレートフラッシュ！」

「ちょ…ええ…！？」

「甘いな、剛毅。まだまだ修行が足りないな。それじゃ今晚のおかずはもらつたぞ…！」

「ちくしょうおおおおおお！」と悶える剛毅をしづめに、トイレへ行くと言つて席を立つたギルバートは、部屋のソファーに座つて聖書を読んでいたティーダのそばを通り、その腕を掴まれた。

「ど、どうした、ティーダ？用もあるのか？」

「お前、何がどうした？ギルバート、声が裏返っているぞ！」

「そ、そんなことねえよ。悪いけどトイレに行きたいから離してください

れ

「…ふつ、そうか。引きとめて悪かつたな。いつてくるとい

そういうたティーダにギルバートは一安心し、次の瞬間にまさに田にもとまらぬ速さで動いたティーダの手によつて、ギルバートの袖口が叩かれた。

バササッと音を立てて袖口から滑り落ちたのはトランプのカードで、そのどれもが役にも立たないよつたカードばかりだった。

「おつと、すまないギルバート。たまたま手が当たったようだ」

「うそつけえ！能力使つてたまたまつて言い張るなんて白々しいぞ！」

「あー！ギルバート！いかさましやがつたな！」

「グッ…ばれたか…！…ええい！騙されるお前が悪い！男ならそんなちつちえこときにすんな！」

「それとこれとは話が別だろ？がーーー！」

自身の能力である身体能力強化系の中の一つ『高速で行動出来る』という力を使つてギルバートの袖口を素早く叩いたティーダは、白々しく言葉を発した。

自分のいかさまをばらされたギルバートは思わず声を大きくしてティーダに突つ込むが、その声を聞いて、ギルバートの足元に散らばる数枚のカードを見た剛毅がギルバートに喰つてかかる。つい数力月前開花したばかりの自分の能力である異能系の『炎』を拳に纏つた剛毅の一撃が、ギルバートの顔面に迫る。

剛毅と似た能力の持ち主のギルバートが、同じように手の平に炎を纏うとその一撃を危なげなく受け止めた。

「フツまだまだ青い剛毅！いくら不意打ちとはいってこんな一撃では俺を倒すことはできないぞッ！？いてえ！？」

そのまま不敵な笑みを浮かべたギルバートだったが、ふいに後ろから飛んできて後頭部に来た衝撃によって体ごと前のめりになつてこけそうになる。

「部屋の中で！あんたらの能力使うなつていつてるでしょ！うがあ！」

同じく続けて飛んできた物体に剛毅も見事にクリーンヒットして、前景になつたギルバートの背後が見れたのも一瞬で、すぐにやつてきた痛みに顔を抑える。

「燃えたらどうすんのよー！」のバカ共！」

片手に氷塊を浮かべたシェイラがこめかみに青筋を浮かべて剛毅とギルバートの方を睨んでいる。

以前2人がふざけて室内で能力を使つたときにあやうく火事になるところだつたのを、自分の能力の氷で防いだシェイラとしては、2人がまた室内で能力を使つたことに対する怒りがこもっている。

「いてて…。いや、シェイラこれにはわけがあつてだな…」

「男なら言い訳するんじゃないわよ！あなたの足元にトランプが散らばつてゐることはいかさまか何かしたんでしょー！それに剛毅も！部屋の中で無暗に能力使つんじやないの！」

毛を逆立てて相手を威嚇する猫のような状態のシェイラに2人はそろつて正座をさせられ、その太ももの上には即席で作られた氷が重石としてドシッと乗っている。

シェイラは怒つてもすぐに何事もなかつたのように振る舞うサバサバとした性格の持ち主だが、唯一の安眠できる場所を失いかねなかつた前回のボヤ騒ぎで本気で怒り、3日3晩口を利かなくなつたことを思い出したギルバートと剛毅はしまつたなあと思いながら黙つて説教を受ける。

「だいたいあんた達はいつもいつも……！」

途中で普段の生活の中のことなどに脱線しかけて約20分以上の長さになつた説教は、今日は来るのが遅れると言つていたユリアの到着でようやく終わりをつげることになつた。

「あれ？どうしたのー？一人とも氷を脚に乗つけて我慢大会？」

ドアを開けてふわふわとした空氣とともに現れて天然ボケをかましたユリアに、怒っていたシェイラも毒氣を抜かれたのか、「気をつけてよね！」と2人に言い切つたシェイラは自室へと戻つていつた。来たばかりで何も分からぬユリアはそれに？マークを浮かべていたが、まあいつかーと思いつなおすと来ていたコートを脱いで、ポールハンガーにかけた。

今日は寒いなーと言いつつユリアは、そのままとてとてと部屋の中央部に置かれていたドラム缶を利用した簡易暖炉の前でしゃがみこんで暖を取り始めた。

燃料に使われるのは灯油や炭などといった上等なものではなく、全世界規模で人間の数が減少したことで廃業に追い込まれたホテルなどの残りものだつた。

管理する者がいなくなつた建物はそのまま放置され、中にあつた家具類も全てそのまま残されているため、それらをギルバートがたく拝借してきたのだ。

かつては綺麗に磨かれていた家具たちは、今では剛毅やギルバート達が暖を得るために解体されて燃料として部屋の片隅に置かれていた。

ちなみに工場跡にある全ての家具や遊具は、そうやつて運び込まれたが解体されずに済んだ生き残りで、今では大事に使われている。そんな生き残りの中の一つである座り心地のとてもいいソファにドカツと腰をかけたギルバートは、慣れない正座によつてしびれた足に力をかけないようにだらうと脱力していた。

剛毅の方は日本にいたころに正座などには既に慣れていたのでそのまま平氣そうに立つてゐる。

そして剛毅は一人で暖をとつてゐるユリアのそばにしゃがみこむと、外の寒さで冷えたユリアの頬に手を添えた。

「あつたかいねえ。剛毅もギルバートも燃料いらずの人間ホッカイ口でうらやましいなあ～」

能力で掌の温度を上げていた剛毅の手がユリアの頬を挟むと、ふにやつとユリアが笑つて気持ちよさそうにする。

「私の能力なんて剛毅達の能力がなんなかつていうことぐらいしか分からぬから全然実用的じやないもーん」

「いやいや、そんなことないよ。ユリアが能力者だつて言つてくれなきゃ俺は信じられなかつたよ」

「お、剛毅！俺があの時言ったのは信じてなかつたのかよー。」

「あ、あ～…。ギルバートだからちよつとね～。こいつ…。」

口を尖らせて拗ねたような口調で言つたユリアのフォローをしていると、ソファで脱力していたはずのギルバートがいつの間にか傍にいて剛毅の頭をパシンと叩いた。

その様子を見ていたユリアが「あははー」と笑つたので、剛毅は苦笑しながら再度口を開く。

「といひで今日ばかりと來るのが遅かつたけど何があつたの？」

「あ、うーん。それなんだけどね…。実は前から言われていたんだけど、お父さんがもうここに来るなつて…。それで言ひ合ひになつちやつて遅くなつちやつた…。」

「うーん、そうかあ…。やっぱり親からしたら心配だよなあ…」

「でも！剛毅やギル達が優しいのは私知つてるし、それを何度も説明したんだけど話も聞いてくれなくて…。それで喧嘩別れみたいな感じで飛び出してきたの…。」

「ユリア。そりゃお父さんの方が正しいぞ。お父さんから見たら俺たちはこんな工場跡にいるんだから、そこいらの『クロツキなんかと一緒に考えるのも仕方ないだろ？』

田じりにちよつと涙を浮かべながらユリアはわづつが、ギルバートが横に首を振りながら少しうれしそうに言つ。

「「めんね。」

「別に…。ゴリアが謝る必要はない。ゴリアは俺たちがそういう奴らじゃないことを知っている。それだけで十分だ。それに俺たちはそういう扱いを受けたとしても何ら変わりはしないんだ。それに…。ゴリアにはそんな悲しそうな顔は似合わない。だからゴリアは笑つてくれ」

ゴリアがしゅんとした様子でぼつりとこぼすように言つた言葉に対し、今まで部屋の一人掛けのソファに座つて聖書を読んでいたティーダがそれをばたんと閉じると、ゴリアのところのまやつてきて頭に手を置いた。

「つか~。あいかわらずキザだねえ、ティーダは。この色男…。」

「今まで何人口説いてきたんだよー!」

その様子を見ていたギルバートはなんとなく変になつた空氣を払拭しようとしてそれを茶化し、そして剛毅がそれに乗つかる。

「分からないな。それに出来ことは俺からではなく向こうからやつてくるものだしな」

それを綺麗にかわしたティーダは、カウンターとばかりにちよつとした皮肉を返してくる。

「つけー! ああああイケメンつていつのは本当に羨ましい限りで! ジデいますよーだ。なあ剛毅!」

「え? 俺に同意を求めるっても…。そつか、ギルは自分がイケメンじゃないのを気にしていたのか。かわいそうに…」

「んだとゴルア！ やんのか剛毅！」

「へえ！ 次こそ決着付けてやる！」

「望むどいんだコラー。かかつてきやがれ。」

またも殴り合いに発展しそうになつた時、ドガントと部屋のドアが開いて、再びのショイラの怒声とともに氷の塊が剛毅とギルバートに叩きつけられて、2人は床に倒れる二つとなりました。

そんないつも通りの光景を見て安心したのか、ユリアの口元には少し笑みが戻っていた。

それから数時間後、ユリアが今日は家の方に戻りたくないと言つたので4人はユリアを泊まらせていくことにして、一緒に食事をとつていた。

食事についても、テーブルの上には缶詰めや賞味期限きりきりの保存食品といったものがならんでいるだけで、手作りの料理というものはほとんどない。

手作りの料理があるといったら、ギルがどこから持ってきた肉を串に刺して、それをドラム缶の炎で焼いたものぐらいだろう。

人類の大部分が消え去つた今では、以前のようにお店にいけば惣菜コーナーに料理が並んでいて、お金さえ払えばおいしい料理が食べれるということはなくなつた。

物資も乏しい今では飲食店と言えば個人経営の貧相な食堂ぐらいで、

味は単調、量も少ない、しかし料金は高いという状態だ。

といつてお金などの持ちあわせがない者は街に残っているものを漁るか、なんとか野菜を自家栽培するぐらいしかない。

剛毅達は栽培をしようにも、店などに肝心の種がないためどうすることも出来ず、街を歩き回って食料を得る日々を送っている。まさにジャングルでの一日が食料探しに追われるだけで終わるよう、この廃れたコンクリートジャングルでの一日も食料探しに追われるだけで終わる。

そんな中でユリアを除く4人が日々の生活に苦しみを覚えて自殺をしないのは、幼少よりそんな厳しい日常が当たり前だったことと、仲間がいて笑あうことができるからだろう。

基本的に食料調達は男子である剛毅、ギルバート、ティーダが行い、やることは限られているが家事をするのは基本的に女子であるシエイラの担当で、ユリアは来た時にその手伝いをするぐらいだ。

シエイラ達が食料調達に出向かないのは、廃れた今の中では荒事に対する力がどうしても必要になるというのもあるが、最も大きい理由は単純に『女性』として襲われるからだ。

以前実際に襲われかけたシエイラは普段こそ強気なキャラを演じているが、実際は心の中で3人に對しても感謝していたりする。

そして今日も一日が無事におわることに安心しつつ、5人は工場跡の中にあるそれぞれの部屋に向かう。

剛毅は5人の中で仲間になるのが最も遅かつたため、工場の出口近くに設けられていた部屋をもらつて寝ているのだが、たまたまその日は寝つきが悪く、浅い睡眠を繰り返していた。

そんなとき意外からかすかにザッと地面を踏む音が聞こえてきて田が覚めた。

野良犬か何かが通ったのかなと寝惚ける頭で考えつつ、ふと外を見ようと思つて窓に近づこうとした瞬間にガラスが砕け、部屋の中に何かが転がり込んできた。

いくつかの穴が空いた黒い筒状の物体が転がり込んできたのに気付いたが、それが何かを思い出す前にそれは目が眩むほどの光と、耳が聞こえなくなるほどの音を放つて爆発した。

まだ頭が微妙に寝惚けている上に、平衡感覚まで失った剛毅の体はグラリと部屋の壁にぶつかり、そのままずるずると床に転がった。

すぐにガラスを破つて入ってきた男は剛毅が逃げられないように動きを拘束しつつ、部屋の外の廊下に引きずり出した。

剛毅はようやく戻ってきた視界あたりを見回すと、そこに同じようく拘束されつつ廊下に引きずり出されてくる仲間たちの姿をとらえた。

一瞬何が何だか分からなかつた剛毅だが、男たちに再度組み伏せられてコンクリートの床に頬を抑えつけられた剛毅は周りの男たちを見てようやく理解した。

こいつらが噂のアビリター狩りの奴らなんだろうと。

逃げようと動いてみるとしつかりと関節を抑えられていて身動きがとれず、炎を出そうとする関節を折られるかと思うほど締め上げてくるので集中力が続かずに能力が使えない。

まわりを見ても、同じような状況なのか苦悶めいた声が聞こえるだけで能力が使われる様子は無い。

「FUCK！なんだつてんだテメーらーあん！？離せよこのクソ

野郎どもがア！」

そんな中でギルバートは唯一動かせる口を動かして相手を罵るが、

相手もプロらしくガスマスクの下にある表情を一切変えることなく再度締め上げる。

「ギル！」

苦痛の叫びを上げるギルバートに剛毅が声をかけるとギルバートは剛毅に気がついたのか、剛毅の方へと顔を向ける。

「剛毅！ああクソ！なんだってんだよこいつらはよおー離せこのクソつたれどもがア！」

しかし、いくらギルバートが叫ぼうと男はギルの関節を締め上げるだけだ。

「ギル！くそ！なんだってんだよー離せー！はなせつってんだろ！クソ野郎！」

剛毅がそうやって叫んでいると、工場の出入口から悠々と入ってきた隊長らしき男が銃の形をした注射器を構える。

「悪いな、坊主。これも仕事だ。怨むなら自分の運命を怨め。」

剛毅は首筋に薬を打ちこまれてすぐにやつてきた眠気に必死に抗おうとしたが、やはり薬の力には敵わずガクリと全身の力を抜いて眠りに落ちたのだった。

003 A dangerous world (後書き)

さてさて、今回もストックのおかげで早めの投稿で”jg”される。熱い展開を書きたいけど、それはまだ先の展開なのです。残念…。もうしばらくお待ちください。

ところで何か感想などがあれば自由に書き込んで下さいね。ただし、私はメンタルが弱い人です（キリッ

それから数時間後。剛毅達は田を覚ますと窓の無い1-2畳ほどの部屋にいることに気がついた。

それぞれの腕や足などには既に拘束具は無く、体の関節を動かしてみても、外れているということではなく、十分に機能している。プロの集団らしき人達が動いていたのに、拘束もされていない今の状況は何か変な気がするとギルバートが思い始めた矢先、部屋の奥の方の壁に埋め込まれたテレビに光が付いた。

破壊防止のためなのか強化ガラスで隔てられた先にある24インチほどのテレビには、まず最初に第一アメリカ合衆国の国章が現れ、次に文字が流れ始めた。

その内容とは要約すると「第一アメリカ合衆国アビリター保護法プログラムの適用により、能力を監視下におけると特別に許可された場合を除き、アビリターを制限保護区域におく」

というものだつた。

この法律は第一アメリカ合衆国として隕石漂着から再生を果たした政府が、アビリター達が持つ個々の能力の暴走や悪用を恐れ、制定したものだつた。

あまり公にされず密かに制定されたこの法律を知るアビリターは少なく、多くのアビリター達がこの法律によつて制限保護区域に送られた。

能力を持たない一般人はアビリターの犯罪に脅威を感じていたのに加え、お金持ちの家のアビリターならば『特別許可』という物を『許可料』を支払うことで免れたため、人権を無視したようなこの法律は、改正される気配が無いどころか逆に支持され始めるほどだった。

そしてこの法律によつて制限保護区域に実質的に連行された剛毅達は、あまりの理不尽さにギルバートが切れて強化ガラスを割り、中のテレビを叩き壊したあと、テレビが終わると同時にロックが解除されていたドアから外に出て、建物の出入り口の窓口のよしなところで割り当てられた自宅用らしき鍵を受け取つてようやく外に出ることができた。

自宅を割り当てられたといつても、隕石漂着のせいでコードトタウンとなつた街の空き部屋を適当に割り当てられただけなので、毎日の安全が完全に確保できているわけではない。

なんとなればアビリターが溢れているであらうこの街でなら侵入など造作もないことだから。

建物の外へ出て周りを見渡すと、立つてゐるマンションの中には窓が割れて無くなつてゐるところの方が割合で言えぱ多いぐらいで、防犯などは微塵も期待できそうにない。

とりあえずは今後住む場所の確保といふことで動き出した剛毅達は、隕石漂着以前に作成されていたのであらう、観光場所なども乗つているカラフルな3つ折りの地図に従つて歩き始めた。

街の雰囲気は明るくも暗くもないが、ところどころには生活用品や食料品といった店などがチラホラとあるので、食料を奪い合つどつた混沌とした様子になつていはない様子だ。

しかし、やはりアビリター対策なのか店の出入口には完全に武装した軍人らしき人が立ち、その奥に見えるレジ打ちの人もやはり武装したままレジ打ちをするといつシユールな光景が目に入る。

そして、店の中でおとなしく普通に買い物をしているアビリターたちがいる一方で、裏通りに通じる路地の方へと視線を移すとガラの悪そうな連中もいる。

ひとえにガラの悪そうな連中といつても皮膚が岩のようなものもいる

れば、獣のような牙などを持つ凶悪そつな一風変わった奴らもいる。

都会の暗闇などで生きてきた剛毅達は、この街に入ってきたそうそう睨まれたくなかったのでそれとなく視線を外しつつ、何でも無い風を装つて通りを進んでいく。

水が枯れてしまった噴水がある広場を通り過ぎ、更に数分歩くと、元は家族が住んでいたのであろう45坪ほどの壁の表面をレンガ張りにした一戸建てが見えてきた。

鍵にくぐりつけられていた札に書かれた住所と、地図に載っていた住所と見比べて、そこが割り当てられた住居だと分かった剛毅達は鍵をドアに差しこんで家の中に入る。

家の中は既に一通り荒らされたあとなのか、家具はひっくり返っていたり、紙屑が散乱していたりと何かの役に立ちそうなものはほとんど残っていない。

あるのは持つていいくほど価値が無い生活雑貨や、食器類などばかりでテレビやパソコンといったものは根こそぎ持ち去られているようだつた。

とりあえず腰を落ちつけようという流れになつた5人は、ひっくり返つていたソファを元に戻し、砂埃をはたき落して窓を開け放ち、換気を始めた。

長い間放置されていたのだろう家の中は埃や、濁つた空気が溜まつており、息をするのが嫌になるほどだが、家中のすべての窓を開け放つと、この街には不釣り合いな爽やかな風が吹きこんできてしまつた空気が一気に一掃されていった。

何か掃除ができるものがあるかと家の中のドアを開けていくと、階段下の収納スペースにホウキや洗剤などの掃除用具があつたので、

それらを駆使して家の中の細かな埃や「ミミ」を取つていいく。

数時間もすると家中は見違えるようになり、電化製品などが無いのでいたさか殺風景に映るもの、5人が住める環境にはなった。

しかし、家の中の窓などは依然として割れたままなので、それらを直さなければ安全は確保できない。

窓をどうするかと話し合つた結果、ただのガラスではこの街では少々心もとないということで、小さな窓はそのままガラスで、人が通れそうな窓は押し開き式の鉄板にすることに決めた。

とはいって、鉄板などがそろそろ過程に転がっているわけもないのに、剛毅とギルバートは鉄板になりそうな材料を探しに出かけることにした。

ちなみにティーダは女性陣の護衛として家中に残ることになった。

「で、探しにわざわざ出てきたわけだけど……まあ……そこら中に散らばってるわな。」

玄関から一歩外に出たギルバートが周りをザツと見渡してつぶやく。家の前の通りには乗り手がいなくなつた自動車が、道路の端の方にパンクした状態で止まつていてたりするのだから、鉄板になる材料などはいくらでもあった。

ちょうど家の前の道路の端に寄せられていた車に目をつけた2人は、内装などの鉄板の材料にならなそうなものを剥ぎとつていく。

あらかたとり終えた2人は、それぞれに能力を使って、熱で鉄を切断し、小分けにして窓のところへと持つていく

高熱で切断したために、常人が振れれば一瞬で大やけどを負う程の熱を持つていてる鉄片だが、剛毅とギルバートは手の温度を鉄片と同じぐらいの温度に上げていてるのでやけどを負うことは無い。

高温の鉄片を窓のところまで運んだ剛毅達は、窓の枠の寸法を探り、その大きさに合わせて鉄片を成型していく。

そのままはめ込んでしまうと熱で窓枠が傷んでしまうため、小さな穴をあけてから鉄板を放置して冷ます。

それが終われば、次の鉄板を作る作業に移り、またそれが終わればまた次へと繰り返していく。

全部の鉄板を作り終えたころには最初に作った鉄板が十分に冷め、窓枠に合わせても問題なくなつたので窓枠に鉄板を当てて、蝶つがいと鉄板を溶接の用量でつなぎ合わせる。

全ての窓に取り付け終えると、閑静な住宅街にたたずんでいたどう家が一変。

まるで小さな要塞のように、鉄で補強されてガツシリとしたつくりのものになつた。

出来栄えを外から見てなかなかの武骨さに満足した2人は、意気揚々と家の中に入った。

女性であるコリアとシェイラはどことなく不満そうな顔だったが、現状を考えると安全優先なのが分かっているのか口をだしてくることはなかつた。

とにもかくにもなんとか自分たちが住める環境にはなつたわけだが、今度は肝心の食料がない。

どこからとつてくるとしても、数時間前にこの街にきたばかりで地理については右も左も分からない5人は本日の夕飯をどうするか悩む。

飲食店などに入れるだけの金が無い剛毅達は、結局はいつもどおりに食料の調達にいくということになつたのだが、今回はコリアとシェイラも含めた5人だ。

当初はギルバートが家で待つているべきだと主張したが、街のことを早めに把握しておくべきだというシェイラの主張と、コリアが3

人が守ってくれるから安心できるよね?といったのにギルバートが折れた。

かくして食料調達に出かけた5人は来るときに見かけた厳重な警備のスーパーマーケットらしきところを田指す。

「へえ…。警備が物々しいから高いと思つていたら意外と安いじゃない。」

店に入ったショイラが店内に表示されている値段の描かれた紙を見渡していく。

「…けど。なんでこんなに安いんだ…?アビリターに対する風当たりは強いっての?。なにかあんのか?」

「ふむ、どうやらわけありといつみたいだな。ほら、これを見てみろ」

激安の価格で売られているものばかりがならんでいる様子を見た剛毅が訝しげに首をかしげる中、商品を物色していたティーダが一つの商品を取つて剛毅に投げ渡す。

剛毅は渡された商品を観察してみると、特にこれといったものは無いように思えた。

「これがどうしたってんだ?特に何も無いように見えるが…」

「賞味期限を見てみる。ソレもコレもアレも…全部賞味期限が既に切れているヤツばかりだ。みろ、この野菜なんて萎びてるし、あの果物なんて柔らかくなってる。」

あれこれと商品を見ていたティーダが色々な品物を見て剛毅に投げ

渡してくる。

そのどれもが賞味期限ぎりぎりなものや、既に過ぎているモノ、缶詰めの商品に至っては大幅に過ぎているモノが大量にあった。

「なるほどね…。だから安いのか。そつかよ…やっぱり、俺たちはそういう扱いなのかよ。クソッ…！」

ギルバートがあまりの扱いに腹を立てて近くの棚をガツと蹴ると、レジにいる男がショットガンを掲んだ状態で5人の方に睨みをきかせてくる。

わざわざ政府に絡んでいる奴と揉め事を起こすのを嫌つたギルバートはイライラとしながらも矛を収める。

すると相手もいつでもショットガンを打てる状態を解除してただのレジ係に戻る。

気分が悪くなつたらしいギルバートは一人で帰るといい、店の外に出ていった。

残された4人は悔しいけれど食べ物が無ければどうしようもないということで、連れてこられるときに没収されずに残つていたユリアの財布の中に入っていたお金を使って食材を購入した。

「それにしても気に食わんな。政府の奴らは俺たちアビリターをなんだとおもつているんだ」

いつもはクールなティーダが少しイライラと怒りをにじませた聲音でいう。

「ちよつと皆とは変わつた力を持つちゃつただけで、それ以外は皆と変わらない人間なのにね…。人間扱いされないともなると…ちよつと辛いなあ…」

「やつね……」いつもあからさまだとちょっとクルものがあるわね……

コリアが少し伏し目がちに落ち込んだ風にいい、ショイラは悲しみと怒りがこもった瞳をしてくる。

「でも、俺たちはどうしようもない……。結局時間が立つて俺たちが認められるまではこの制限保護区域からも出られないんだろうな」「認められる。認められなければ……、その時は無理やりここでも認めれやるだけだ」

少し弱気の言葉が剛毅の口から出ると、ティーダが静かに、それでいてはつきとした口調で言った。

剛毅はその言葉に何かを感じた気がしたが、その何かが結局わからなかつた。

さてさて、早めの更新第4段です。もつもつもんストックが無くなつてくるので、更新頻度が落ちます。

たぶんあと1話ぐらいは早い更新ができるかとおもいます。
4話ほど進み、どうでしょう?ちょっと展開が急かなとは思ったのですが、あまりグダグダするのも…と思ったのでこんな進め方にしました。

要望があれば、外伝的な感じで剛毅が育てられてきた背景とか色々詳しいのを書こうとも思います。

ギルバートは一人で夜の黒に塗りつぶされた裏路地の闇の中を歩いていた。

「……いい加減出てこいよ。下手な尾行なんかしやがって……バレだつづーの」

くるつとギルバートが背後を振り返ると、建物の影の中から2人組の男がてきた。

片方は腕に巻きつけるようにして水を流しながら自分の能力を見せつけてくる長身の男で、もう片方は獣のような体毛に鋭い爪、牙を持つ獣男だった。

「ハハッ。いつからきづいてたんだい？ これでも僕らは結構尾行がうまい方だと自負していたんだけどね」

「最初からだ、バカが。大方スーパーから出てきた俺が金を持っていると踏んだんだろうが……。生憎だな、俺は金なんてもっちゃいねえ。丁度いいからかかつてこいよ、今の俺は気分が悪いんだ。ぶちのめしてやらあ」

拳から炎をまき散らしながらギルバートは相手に手を向けてクイクイツとかかつてくるように手の掌を自分の方に数度折り曲げて挑発する。

「へえ…。いい度胸だね。でも相手が悪いよ、君。僕の能力は水。火ごときが僕に勝てるわけ無いじゃないか。痛い目をみないうちに膝について謝つたらどうだい？」

「へへへッ。そうだ、わりにこたあいわねえから俺たちに許しをこいな。今ならその生意気な面に拳をブチ込むだけでゆるしてやるぜえ？」

「ハツ、バカが。ワン公はそこらの電柱にでも小便しどけ。そっちのキザつたらしいお前もかかつてきたりどうなんだ？」「くら賢そうな言葉使いをしてもそのバカ面はかくせねえぞ」

「てめえ！野郎ちようしにのりやがってえ！」

獣男のニヤニヤとした顔が怒氣で一気に茹あがるように真っ赤に染まり、水使いの男が目をむきだして怒鳴る。

獣男が強靭な脚力を使つてすぐに肉薄してきたが、ギルバートは下から救いあげるような見事なアッパーを獣男に返し、のけ反つて無防備になつた胴体に真っ赤な炎をまき散らす拳を叩きこんだ。

炎を纏つた拳はやすやすと獣男を吹き飛ばし、拳が当たつた獣男の胴体には拳の跡が焦げとなつて焼きついていた。

「つけ、雑魚が……おい、どうしたよ。てめえのペットのわんちゃんはおねんねしたぜ。お前も一緒にあそびでおねんねするか？ ん？」

一瞬で倒された味方に啞然としている水使いだつたが、ギルバートの言葉で直ぐに頭に血が上り、自分の能力を使い始めた。

腕に巻きつくよつにして流れていた水は腕から離れ、まるで鞭のようにしなつたあと、鋭い先端をつくりギルバートめがけて飛んでくる。

無限に伸び、思い通りにしなり、蛇のよつに素早く動く自分の必殺技が決まったとおもつた水使いは口元にニヤアツとした笑みを浮か

べ、ギルバートを見るが、ギルバートもまたニヤツと笑みをつかべていた。

一瞬怪訝に思つた水使いだが、ギルバートに避ける気配が無いことに気付き、勝つたと確信した。

しなる水の槍がギルバートの頭に当たると思った瞬間、その水の槍はギルバートによつて掘まれて一瞬で蒸発した。

「な！なせだ！貴様は火だらう！なせ水があまえにきかない！」

「ハツ。お前勘違いしてゐるぜ。俺は『炎』使いだ。ちんけな水鉄砲なんかじゃ俺の炎はけせねえよ」

そういうギルバートは拳の炎を一際大きくし、拳を覆い尽くすほど炎のグローブをつくり、一瞬で接近してうろたえる水使いの腹の中心に拳をブチ込んだ。

全体重を乗せた炎のパンチの威力に体をくの字にあれさせて吹っ飛んだ水使いは、そのまま裏路地の壁に叩きつけられてズルズルと汚水や埃で汚れた地面に横たわる。

「ケツ。バカが。もうちょっと成長してから出直せ、雑魚」

最後に一警したギルバートは、2人の男の懷から財布を抜き取り、中の金を抜き取ると空になつた財布をぞんざいに投げて返してその場から立ち去つたのだった。

「ただいま」

新しい住居となつた場所に帰ってきたギルバートはソファにどつか

りと腰を下ろした。

「おれかつたじやない。先に帰ったはずなのにビリヒリってたの？」

「ん、ああ。なんか『チャ』『チャ』つるせえ奴が絡んできたからぶつ飛ばしてきた。はい、お小遣い」

「ん、そう。お疲れさま。今までの分はなくなりやつたし、貯めておくわね」

そういう世界で生きてきたショイラは綺麗事だけで生きていけないことはとっくに分かっているのでそのお金を当然の通り受け取り、家の中に残っていたのだろう黒い財布にそれをしまった。

「ああやつやつ。『飯だけ』じゃなくてたべやつたわよ。まだ残つてるから後で食べておいてね」

「りょーかい

そう答えたギルバートはよしとソファから腰を上げ、テーブルの上に置かれている缶詰めからスパム缶を一つ選び、それをあけてペロリと平らげた。

余分な油は特に使い道もないのに排水溝にそのまま流し、来た時は通つて無かつた水道が使えるようになつていたので、シンクに残つたカスを流す。

空き缶をゴミ箱に投げ入れたギルバートは、対して膨れなかつた腹をさすりながらまたソファに座りなおす。

それを見ていた剛毅は、特にやることも無いのであることを思い出して、自分の首筋に手を当てた。

手を首筋にあてると、皮膚の下から少しがシとした違和感が

ある。

その違和感の正体はアビリターの体に埋め込むタイプの追跡装置だった。

連れてこられた眠っている時に埋め込まれていたのか、施設で見た映像で説明をうけてようやく気付けたぐらいだつた。

アビリターの行動を把握するという名目で付けられているだけで、激しく動きまわっても問題なく、人体に何らかの悪影響を及ぼすものではないのだが、ふとした拍子に違和感をかすかに感じるので剛毅はどうも気に入らない。

それに、まるで自分が政府に管理されているペツトの様な気もしてきて剛毅は余計にこの機械のことが気に食わなかつた。

とはいへ、壊したり、とり出したらすぐさまこの機械を管理している施設に報告が行くようになつてこらしのでおいそれと手を出すわけにはいかない。

全くもつて忌々しい法律を作つてくれたなあと思ひ剛毅は、首筋からよつやく手を離した。

「そういえば明日市街地郊外の元陸上競技場までいかないといけないんだつけか?」

ソファに座つてゆつくりとしていたギルバートがふと思ひ出したように戸を発すると、コリアがそれにこたえる。

「そういえばいつたね。色々なことがありすぎて忘れてたよー。

」

「まあたしかに色々あつたしね…」

コリアの言葉に、シェイラは苦笑いを浮かべつつも、コリアはこんなときでもマイペースなのね等と思っていた。

「で、どうするの? いくの?」

「あー。別に絶対こと言われたわけじゃなかつたしなあ。俺はめんどくさいこんだが…」

「…こや、俺はいつた方がいいと思ひ」

ショイラの呼びかけに、ギルバートは面倒くさそうに頭をポリポリとかきながら答えたが、そこにいつのまにやら部屋のドア付近の壁に寄り掛かっていたティーダが口を挟んできた。

「お、ティーダか。いつのまにそいついたんだ?」

「ついで。それさておき、俺たちはどうせ何も予定が無いし、この街についての情報はほとんどといつていいほどないんだ。わざわざこんな街を作つてまで俺たちを『保護』してくるんだ。いきなり射殺とこいつとはないだろ?」

「… そうね。私も行つてみた方がいいと思つわ。何も知らないよりは何か少しでも情報がある方がこんな街だと安心できるからね」

「私も行つてみたいなー。同じ境遇の人たちとならちよつとは仲良くなれそうだしー」

いや、それはないだろ? とユリアを除く全員は思つたが、ユリアは笑顔を浮かべていて素で言つてこそのので、葉に出すことは無かつた。

「剛毅はどうおもつの? なんだかわつきから黙つぱなしだけだ」

ずっと黙つたままだつた剛毅に気付いたのか、シェイラが話を剛毅にふる。

「ん~…。 そうだなあ。まあなんだか怪しい気はするけど、流石に命がかかるということは無いだろうし、別にいいんじゃない?」

剛毅は少しだけ、なんだか面倒くさそうになりそうな予感がしたが、とくに気にしないことにして、賛成の方に回った。

「なんだよー。俺一人だけ仲間はずれかよー。まあいいわ。どうせ俺も家にいたつて暇だらうしついでいくことにする」

一人だけ反対の方に回っていたギルバートも他の全員が賛成側に回つたので、一人だけのお留守番を嫌つて賛成側へと旗色を変えた。翌日、全員で元陸上競技場に行くことにした剛毅達は、それぞれが掛け布団などが無いマットレスがむき出しのベッドに横になつて眠つた。

翌日、広場までわいわいと雑談をしながら徒歩で向かつていた一行は、広場についてから驚いた。

それもそのはずで、体格も人種も雑多な人々が広場に集まつていて、しかもそのすべてがアビリターというのだから驚くのも無理は無い。呼ばれているのが自分たちだけではないだろうと思っていた剛毅達も流石にこの人数には驚いた。

ざつと見渡して約2000人OVER。

到着してから見た競技場案内看板によると、まだ第一・第三競技場があるのでしかしたら6000人は超えているのかも知れなかつ

た。

これほどの人数を集めてどうするのだろうと思いつ剛毅達だったが、周りの人々は適当にそこらへんに座つていたりするので、とりあえず腰を下ろそうといふことにした。

「それにしても多いな。さすがにこの人数は予想外だつた

「そうだねー。こんなに人集めてどうするんだ？」

「さあな…。なんにしろ、奴らがこんな街に俺たちを閉じ込めている時点で、手放しで喜べるようなことが起きるとは思えん」

ティーダの一言にそれもそうだと全員がつなづくと、ちょうど競技場のスピーカーから音声が流れ始めた。

と、同時に競技場のスタンド付近に作られている台の上に立つてマイクを軽く叩いている男性の姿が見えた。

「あ、あー、テステス…。ん、…皆さんおはよつございます。私はアビリター特別保護区域『特区』の責任者のマイク・ダグラスです。今田皆さんに集まつてもらつたのは、お願ひがあるからです。それは、皆さんに軍に入つてもらいたいというものです。もちろん、軍に属していただけば、任務内容に見合つた給料や様々なサービスを提供しますし、安全な住居も個人に贈与いたします。ですが、それと引き換えに色々と制約も課せられます。犯罪を犯せば軽犯罪以外は全て死刑、出動時には危険な任務が与えられますし、国家には忠誠をつくすことを誓つてもいます。入隊してしばらくの間は、訓練期間として軍の施設にしばらく入つてもらうことになりますが、そこでもこの制約は課せられます。もちろん訓練機関でも給料はうけとることができます。ですがもし、軍に入りたくないという方が

いても問題はありません。ただし、その場合は当然給料も出ませんし、安全で快適な環境というのも提供できません。」

「皆さん方アビリターは、今非常に微妙な位置にいます。」

剛毅は微妙どころか今は最悪な位置にいるじゃないかと心の中で思つていた。

「アビリターの皆さんには、一般の人が持つことが出来ない特殊な能力が備わっています。その力は個人個人によつて性質も影響の大きさも様々ですが、悪用をすれば危険なものであることに変わりはありません。現在、アビリターの能力の使用に関して適正な法というものが整備されていません。だからこそ、私を含む一般の方々はその能力に恐怖し、自分達と違うものということで排除しようとします。私もアビリターの全員が危険だとは思つていますが、そういう風に考える人たちが大勢おり、世論がそういう風に動いてしまうことをお許しください。今はまだ大規模な犯罪が起きていないので大きな動きはありませんが、もしひとつたび間違いが起きてしまうと一気に人々の感情の堤防は決壊し、中世ヨーロッパで起きた魔女狩りが再び行われかねません。だからこそ、アビリターの皆さんには軍に所属し活躍をすることと、今にも崩れかねない危うい立ち位置を確固たるものとして欲しいのです。重ねて言いますが、これは強制ではありません。あくまで自由意思によるものです。……それでは、最後になりましたが、皆さんのが良いご決断をなされることを私は心から祈っています。今日は集まつていただき本当にありがとうございました。」

そういつてマイク・ダグラスが深々と頭を下げてから台を降りた後、入れ替わるようにして黒いスーツに黒いサングラスをかけた男がマイクを握った。

「さきほどお話を聞いて、軍に属してみたい方、詳細を聞きたいという方は」そこから数歩いた先の第三競技場奥の広場にテントが複数あるので、そこで話や手続きを受けてください。それでは、皆様本日はお集まりいただきありがとうございました。これにて解散とさせいただきます。」

スーシにサングラスの男はそれだけ「う」と台の上で一礼し、それからマイクとスタンドを持って台の上から下りて行った。

「はあ……また面倒なことになつたなあ。軍に入れつてか。どする？」

ギルバートがあからさまにため息をつき、首だけをぐるりと回して後ろを振り返ると、そこにいる剛毅達に尋ねる。

「ふむ……俺は反対だな……。邪魔な俺たちをわざわざ起用するなど、俺たちを兵器として前線で酷使するためとしか考えられんな。国に捕らえられた俺達がその国のために命を賭す……俺は「ゴメンだ。……とはい、先立つものが無いし、この街での稼ぎ方も分からぬのは事実だ。俺としては中立。お前たちの意見に従うとしよう。」

ティーダはそれだけ言つたあと、木陰に移動すると木に背を預けて座り込んだ。

「ふーん、ティーダは中立……ね。私もどっちでもいいんだけど……。やっぱりお金とかこれからのことを考えると、『軍に入つた方がいいのかなあ……。私は一応賛成つてことにしてくわ』

「シユイラちゃんは賛成かー。私はせっかく綺麗にしたここを離れ

るのはイヤかなー。それに軍に入っちゃうと制約とかで自由が無くなりそうだし…。まだまだ色々と大変だとは思うけど、皆で力を合わせたらなんとかなるよー」

「ふむふむ、ティーダが中立、シェイラが賛成、ユリアが反対か。こりやまた綺麗に分かれたもんだな。んで?剛毅はどうするよ?」

シェイラが金銭面の問題で軍属賛成派。ユリアが生活面で反対派といった具合に別れるのを聞いたギルバートが残つた剛毅の意見を求める。

「あー。俺は賛成かな。やっぱりどうしても金は必要になるだろうからなあ。…でも、軍にシェイラとユリアを入れるのには反対だな。俺のイメージでしかないけど、男の比率が高いところに2人を入れて、襲われないとは言えないからな。2人はこの街にとどまるべきだと俺は思つ。」

「なるほどな。たしかにそりゃあるだろうな。たまに軍がレイプやらなんやらで問題になることがあるしな。剛毅の言つとおりにした方がいいかもしれん。ちなみに俺個人の意見を言わせてもらうと、賛成だ。ただ、俺も剛毅の意見に賛成で2人は絶対に残す。でも、それだとこの街で暮らすことになる2人が心配だから、ティーダに残つてもらいたいんだが、ティーダはそれでいいか?」

「かまわん。もとより俺は軍属反対派だ。金銭面でどうにかなるなら問題はない。2人のことは俺が責任を持つてまもろつ。」

「すまんな、ティーダ。まあ訓練施設に入るつたつて休日でもどつてくれるぐらいできんだろ。」

「ちよ、ちよつとーじやあギルと剛毅の2人だけで軍に行くつていつのー?」

「それしかないのは分かつてるだろ?それにお前たちはもう一度末遂とはいえ、襲われかけるだろうが。俺としては目の届かなくなる可能性のある場所にお前たちを入れるわけにはいかねえ。」

ギルバートの断固とした意思が込められた視線を向けられたシェイラは、なにも反論することが出来なくなつて口を開さず。

「じゃあ休日になつたらちゃんと帰つてきなさいよーそつちで遊び呆けていたら絶対に許さないわよ!」

「ハハハ。そりや絶対に帰つてこなきやだめだな。シェイラを怒らすと後が怖いからなあ。」

「剛毅!あんたもよ!あんたも遊び呆けて戻つてこなかつたらヒドイ田にあわすからね」

他人ごとだと思つてギルバートとシェイラの会話に笑つていた剛毅は、シェイラの言葉にその場でビシッと固まり、その様子を見られた皆に笑われることになつたのだった。

005 Word started to move（後書き）

さて、ところが5話が終了したところで、これから進め方にについて説明いたします。

第二章は基本的に剛毅とギルバートとこれから出てくる人達で織りなす軍務編という感じになります。

なるべく軍っぽくしたいとは思いますが、私が軍の内部を把握していない&あまりきつくしそぎたら進めにくいところで自分なりに適当に設定作りながら進めていきます。

なので分かりづらいところがあつたら質問してください。なるべく早くお答えします。

そして、街に残ることになる3人ですが、こつちは第一章番外編といつた感じで、第二章本編が済んだあとにお送りするつもりです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7462y/>

+ BURNING BLOOD +

2011年11月27日08時52分発行